

向井潤吉の素描

7月29日^土 – 11月26日^日



〈不祥（林檎園の剪定風景）〉1955年頃



〈崖の村（三重県）〉1965～75年



〈雨後千曲川（長野県下水内郡豊田村豊津路）〉1977年

素描とは、画家が対象に集中し、見る動作と描く動作を巧みに連動させた成果です。心に映った瑞々しい発見と驚きが、一つの新しい造形をなす、それは創作の源泉ともいえます。

線と淡彩で構成されたそれぞれの素描には、向井潤吉の対象に迫る緊張感ある眼差しと、自由に広がる筆触が同居し、表現することの楽しみと喜びが感じられます。

向井潤吉は昭和2年から昭和5年にかけて、パリへ渡り、主にルーヴル美術館において、古典名画の模写に打ち込みました。同時に彼はアカデミー・ド・グラン・ド・シヨミエールへも日参し、繰り返しクロッキーに取り組みます。向井潤吉は、人体クロッキーにおいて、その構造、形態、量感を、よりの確に捉える線の本質を追求しました。

今回、ご紹介いたしますアカデミーでの人体クロッキーは、その最初の渡仏から30年程の時を経た昭和34年、向井潤吉が58歳で再び訪仏した時の作品です。向井潤吉は、ひとりの画学生に戻ったかのように、数多くのクロッキーを描き、また滞在中には、周辺諸国へも足を延ばし、行く先々でスケッチを重ねました。それは、初渡欧で得た感動に通ずる、創造することへの喜びをかみしめる、精気に満ちた時間であったことでしょう。

向井潤吉はクロッキーで学んだ成果を、次のように述べています。

「私が油彩、素描、クロッキーの別なくいつも写実的な仕事に執念を持つ神経の一端には、可及的に思うまま、見たままのものを率直に表現したいためであって、その訓練にはクロッキーが、時間的にも一番適していると思うのである。」（保育社「向井潤吉 素描集」より）

5分間ごとにポーズを変えるモデルを前にして、かたちをなす構成要素を瞬時に捉えて、画面を作り上げていく修練が、向井潤吉の卓越した描写力を養っていったのでしょうか。

向井潤吉が描く民家には、ある種独特の風合いが感じられます。それは、向井潤吉が常に現場において制作を重ねたことに、深い関わりがあるようです。眼前で刻一刻とうつろう自然の表情を、瞬時に捉え、と同時に画面に描き込んでいくそうした行為には、向井潤吉が感受した周辺の気配までもが写し取られているようです。視覚と感性を通じて創出された臨場感、それこそが向井の作品に満ちる独特な風合いなのだと考えましょう。私たちはそこに、向井潤吉が素手で掴んだ感動を、絵画を通じて共有しているのだと思います。

総じて、クロッキー、戸外でのスケッチ、また民家を描いた油彩には、いづれも対象に向き合って生じた画家の感動と洞察力を感受することができます。向井潤吉の多彩な表現を支え、その展開に寄り添ってきた素描の妙味をお楽しみ下さい。



〈裸婦（パリ・グラン・ド・シヨミエールにて）〉1959年